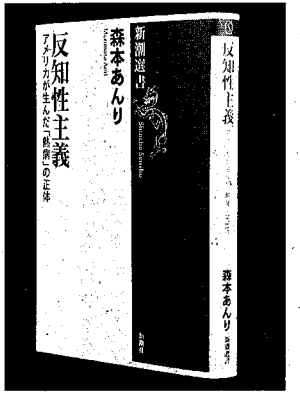
反知性主義　森本あんり著　新潮選書　1300円

米国の不可思議さに答え

評・村田 晃嗣（国際政治学者 同志社大学長）

一方で、数々のノーベル賞受賞者を輩出しながら、他方で、進化論を否定する者も少なくない――アメリカとは何と不可思議な国であろう。こうした素朴な疑問に、本書は真っ向から答えてくれる。

北米大陸に入植したピューリタンたちは、やがて牧師の枯渇することを恐れた。そこで、彼らは牧師養成のために、1636年にハーバード大学を創設した。イェール大学やプリンストン大学がこれに続く。いずれも、合衆国建国の以前である。学位をもつ牧師たちは、難解で長時間に及ぶ説教を競い合った。また、ピューリタンの教会は、新世界で体制の主要な一角を担うようになった。こうした教会の体制化や人口の増大、印刷の普及によるメディアの拡大などがあいまって、信仰復興運動が起こり、アメリカ史上数度にわたって繰り返される。つまり、過度な知性主義が権威や権力と結びつくことに対する反発として、反知性主義が高まってきたのである。そして、この反知性主義はしばしば政治と連動し、ショービジネスの様相も呈していく。



◇もりもと・あんり＝1956年生まれ。国際基督教大・学務副学長。著書に『アメリカ・キリスト教史』など。

本書は、反知性主義の担い手たちを軸に、アメリカ宗教史をたどる列伝である。しかし、単なる宗教史にとどまらず、文化史であり、政治史、大学史でもある。「エルマー・ガントリー」や「リバー・ランズ・スルー・イット」など通好みの映画のエピソードも、巧みに盛り込まれている。こうして、本書は、軽妙な語り口で、重厚なテーマを様々な文脈の中で吟味してくれる。

そもそも、反知性主義は知性を前提にしている。そして、知性は自省、「ふりかえり」を必要とする。この点で、知性は単なる知能とは異なる、と著者は指摘している。「反知性主義を成り立たせるためには、批判すべき当の秩序とはどこか別のところに自分の足場をもっていなければならない」。その意味で、中途半端な「半」知性主義（竹内洋）にある日本の知的・政治状況への警鐘が、本書には込められている。